読売歌壇

小池　光　選

暗闇を御者なき馬が行くごとし阿諛追従の群れ引き連れて　横浜市　森　秀人

【評】トランプ大統領のことを歌っている。まことにこの通り。その乱暴さ、粗野さ、こわい者知らずのふるまいに世界中が圧倒されている。まさに暗闇を行く御者なき荒れ馬だ。

進み出て「ボクがじいじの孫です」と挨拶する孫我が誇りなり　つくば市　小林　浦波

【評】孫はいくつくらいか。もう成人だろう。人前で堂々とこういう挨拶をする。わが誇りだ。「進み出て」という歌の出だしが動きがあってよい。しあわせなじいじである。

もと湯屋の無用の長物煙突は生きながらへて街を見下ろす　久喜市　深沢ふさ江

【評】煙突は解体するのが厄介で相当の費用がかかる、と聞いた。それで一本だけいつまでも残っている。生きながらえて、がよい。

万緑のなか覚束ない足どりで一升餅背負ひ孫は歩めり　町田市　谷川　治

白眉とふ言葉思ひてわが眉に一本生えし白毛は抜かず　稲城市　山口　佳紀

細き文字「元気でいてね」文残し兄は逝きたりはや一周忌　東京都　関　雪子

亡き母の手の温もりが残る鍬に畑打つ朝郭公の啼く　青森市　安田　渓子

菜園の草取り早朝やり終えてあとは晩酌までの気楽さ　鯖江市　伊藤　敏晴

羅の飲み屋のママの色っぽさお銚子二本で酔いまわるなり　下妻市　神郡　貢

病室に香水瓶を並べ置き妻の入院半年過ぎぬ　東久留米市　郷間　浩明

栗木　京子　選

梅雨明けの日射しは強く木陰にて足を畳める神鹿の群　京都市　峰尾　秀之

【評】神鹿は神社の境内などで飼われている鹿。奈良の春日大社の鹿が有名である。「足を畳める」に鹿たちの静かなたたずまいが描かれ、神聖な雰囲気が伝わってくる。

靴用の手書きの名札も配られて独居老人百名の宴　糸島市　原田サツ子

【評】靴を脱いで大広間のような所に集まったのであろう。取り違えを避けるべく、靴に名札を入れておくのだ。名札が手書きであるところに自然体の温もりが感じられる。

旅先でちらりと我を思い出した証拠のような甘いお土産　オランダ　宮沢　洋子

【評】土産をくれた人は甘党ではないのだろう。作者のために、と旅先で買って来てくれた。「証拠」という言葉が嬉しそうだ。

乗り換えて一駅ごとに席が空くまた無人駅ここがふる里　松戸市　森岡　雅信

長き髪ときおり指でかきあげて姪は新婚の旅を語りぬ　東京都　出蔵　和子

「もう伐ろう」聞こえたらしい老梅は三年振りに大き実たわわ　逗子市　富岡　桂子

咲き誇る藤棚の傍で待ち合わせ妻の遅刻が今日は楽しい　山形市　柏屋　敏秋

赤んぼの泣き声がする喫茶店きみもやがては恋の歌詠む　札幌市　橘　晃弘

社会面に並んで載りし記事悲しクマの衝突パンダの帰国　横浜市　高野　令子

すべりひゆ茹でて食せばぬるぬるとこの味なるか母の戦争　千曲市　米沢　光人

俵　万智　選

蟬の羽化に息呑む子らのきみたちもひかりまみれで生まれたことを　千葉市　芍　薬

【評】子どもたちの様子を見守りつつ、君たちもそうだったんだよと重ね合わせている。「ひかりまみれ」が神秘を伝えて美しい。「きみたちも」という切り替えと結句の言いさしが、歌全体を大きくしていて見事。

思い出に浸るわたしを宛先とする絵はがきを旅に選びぬ　東京都　富見井高志

【評】未来の自分に宛てた絵はがき。きっと余韻に浸っている頃だろうから……と見越した視点が面白い。

「先生にはわからないよ」と言われおり昔の私の眼をした子らに　大和郡山市　大津　穂波

【評】いい先生だなと思う。自分にもあった大人への反発の時代を思い出しつつ、生徒たちと向きあっている。

黒鍵で「ねこふんじゃった」を弾くように日陰日陰へ跳び移る夏　船橋市　矢島　佳奈

植えられた苗はミシンの跡に似て今年の夏が縫い付けられる　越谷市　あきやま

描き過ぎた眉をかき消す時間なく失敗したなの顔で出かける　松江市　犬山　純子

新鋭のガラス作家の箸置きとやや前向きな暮らしはじめる　東京都　音羽　凜

青を待つ向こうに人がいるだけで一人じゃないと思えたあの日　川崎市　水　面

正解はひとつだけじゃない世の中でピアニカを吹くピアニカを弾く　大阪市　小川　美帆

何でもない日だから君のために咲く両手いっぱいの花束渡す　東京都　富尾　なつ

黒瀬　珂瀾　選

やわらかな磁石のごとく早朝のミミズは蟻を砂鉄となせり　土浦市　大竹　淳子

【評】ミミズの死骸に蟻がたかる。よく見かける景ですが、磁石と砂鉄という比喩に注目。小さな生死の交錯から詩情を紡いだ一首です。「やわらかな」という描写も良いですね。

壊れないはずと思うが落ち着かぬ保護者が座る園児の椅子は　横浜市　臼井　慶子

【評】私も保育園の保護者会でちっちゃな椅子に座ったからよく分かる。この歌は先生側の目線でしょうか。みんなすました顔をしていても内心ハラハラしているのでしょう。

蝶々を「ちょちょまん」と言う故郷は夏へと向かう田植のころか　兵庫県　若藤　成生

【評】栃木県の葛生、田沼の辺りの方言とか。他にも同類の方言があるかも。幼時の言葉と故郷の記憶が、夏蝶を見て甦るのです。

背伸びして採りし木いちご二つぶを口に含んで五千歩目指す　仙台市　植沢　悦子

さっきまで此処にいたのにもう居ない落ち着きないね私のメガネ　岩国市　井川　栄子

花石榴活けてゐた祖父実石榴を漬けてゐた祖母とほき夕焼け　名古屋市　山守　美紀

外壁はまだ五年ほど持つだろう中身は年を越せるだろうか　高岡市　池田　典恵

人生に「降りますボタン」あったらと思ふことあり夕暮れのバス　仙台市　岩間　啓二

懇切な斧鉞たまはりし岡野師父満百一歳の誕辰むかふ　埼玉県　酒井　忠正

万博に世界の国が輪を作りその傍らで戦火は止まず　所沢市　岡田　陽一

◇投稿規定◇　はがき1枚に未発表の1作品。住所、氏名（ふりがな）、電話番号を明記。◇他の媒体、選者への二重投稿は厳禁です。選者が添削することもあります。〒103・8601、にほんばし蔵前郵便局留、読売歌（俳）壇、○○先生（希望選者名）係または読売新聞オンラインから　◇毎週月曜日に掲載　右の影絵はうみのひ